六年一組の事件

包丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
六年一組の事件

【Ｎコード】
Ｎ００８７Ｋ

【作者名】
包丁

【あらすじ】
　あたし達、六年一組のハツラツ三人組。愉快なことが三度の御飯より大好き！今は椅子に夢中よ。そんな三人組の周辺で、怪事件が・・・真横にコンソメにクリームを混ぜたソースをかけたのは誰？菊山君の頭にくっついているフードプロセッサーを盗んだのは誰？え！あたし達がやったんだろうって！？すごい冤罪！絶対真犯人を見つけてやるんだから！

第一話　椅子を振り回して

初めまして。あたし、山見ゆり。
歳は爆音と白煙とともに１１歳、もち人間で言うとね。
生卵で言ったら、１１年だから完全に腐っているわね。
中の部分がもう想像絶することになっているはず。
もうそこには人々が簡単に見ることのできない小宇宙が形成されたり、ビルが形成されたりしているはずなの。
それをふくめて、あたしは小学校６年生。
B型蟹座、蟹の種類は宇宙革命蟹、この蟹はあたしがついこないだ作った想像上の蟹。
宇宙革命蟹は人の手で育てられたため人懐っこい、アライグマ。
もちろん著作権は「ホウ～！」の奇声とともに主張するよ。
ハサミはすごいパワー！
横綱！！
ブルドーザーでもかなわない！
小さめのおばあちゃんぐらいなら、土星までブン投げる！！
味は衣がサクットしていて中身はサクットしている、結局どこをとってもサクットしている、性格も比較的サクットしてる。
でも怒るとパワーが１０倍になって怖い！
それをふくめてあたしの背はクラスで真ん中あたりかな。
ここはあたしの住んでいる、目やに団地の近くにある公園。
じつは今ね、椅子を振り回していたところなの。
親友の水野佳代と寺鹿模酢といっしょにね。
「ちょっといいかげんにどいてよ！」
そう言って、あたしのことを椅子でぶん殴ったのは佳代。
さっきからあたし、佳代の体の上に椅子を置いて座って、なおかつ椅子を振り回していたのよね。
偶然なんだけど、たまたま公園の中で佳代が寝ていたから、そこに

椅子を置いて座って椅子を振り回していたの。
もう、すごい佳代の上って座りづらくてどうにかしって感じ。
「重いじゃないの！少し太ったんじゃない？」
佳代はO型の水瓶座、目がごぼっとしたかわいい子。
椅子で殴ったり、火をつけたりするとすごく怒るのよ。
でも誤解しないで、すごくやさしいい子なの。
そんなに太ったかな？
そういえば少し太ったような気もする・・・
朝起きたら冷たくひえたサラダ油を一気飲みでしょ、朝食は軽くゴルゴンゾーラチーズを体重の半分食べるでしょ。
お昼はゴルゴンゾーラチーズとサラダ油を混ぜた物。
これだけだと少し味がしつこいからミントのガムを混ぜる、どれくらい混ぜるかはお好みで。
できた物が、あたしのお昼ごはん。
夕飯は、さすがにサラダ油は飲めないのでマーガリン３個とバター６個を溶かして一気飲み。
あとはゴルゴンゾーラチーズを好きなだけむしゃぶりつくわけよ。
うーん太る理由がわからないなぁ。
むしろ痩せていってもいいくらい、がりっがりにやせてもいいくらい。
なんで痩せないの！
納得いかないから裁判で徹底的争っていきたい。
でもだれを訴えたらいいのかしら？
太っているあたしをあたしが不服として訴えるわけだから、自分を訴えるわけで・・・まぁ納得いくまで争うわよ。
「さっきから何、二人で変なことやってるの！？」
そう言って突っ込んだのは模酢。
模酢はA型の牡牛座、背が高くて美人。
とにかく突っ込みまくる。
はっきり言ってこの人がいないと話がまったく前に進んでいかない。

「変なことって何よ！公園で、人の上で椅子を振り回すことが変なことだとでも言うの？」

言い返すと、

「十分すぎるほど変だろ！なんでそういう事態になるのか想像つかないもん！？」

そんなこと言われても、すごく自然な流れでそうなっていったんだもん。

佳代が寝ていたら、その上で椅子振り回す過激な破壊行為するきゃないじゃん。

もしかして椅子の振り回す角度が悪かったのかしら？

あたしって椅子を振り回すときどうしても癖で、右ひじがさがっちゃうからそれの関係で模酢は言ってるかしら？

「わかったわよ、模酢。右ひじの角度が変ってことなんでしょ」

「違うよ！？椅子を振り回すことだよ！」

「それは変じゃないでしょ。ねぇ、佳代」

「それは変じゃない」

あたしも佳代もうなずく。

「そこを認めないの！？そこは認めようよ！」

第二話　謎の男の子

やっぱし人の上に乗っかって椅子を振り回すのって変なのかな？
少し落ち込む・・・でもあたしは負けない！
「ゆりは何をやってもすぐ諦める、根性なしのクズでゴミ虫！ゴミ虫にすら劣る！ゴミ虫のうんこの、うんこだね」
っていつもパパとママに口汚く罵られるけど、人の上に乗って椅子を振り回すことだけは絶対うまくなるんだい！
めちゃくちゃＢｉｇになってやるゾ！！
そんであっという間にハリウッドでもおなじみの顔になってやるのだ。
油をまいて火をつけたコースに向かって、金の仮面をかぶり椅子を振り回しながら走り出そうとした瞬間。
「じゃまだどけ！」
「キャアッッッ？何！？」
突然の声に驚いて、頭が１．５センチくらい割れて、中から味噌、ゴマ、山椒がこぼれた。
あたしの頭の中は九州地方産のゆずこしょうを加えて、ピリッとした辛い味付けにしている。
すぐ横をアサリをもった下呂武がすごい勢いで走ってったの！
下呂武ことゲロは、服にいっぱい火がついて燃えた。
赤くて綺麗だな・・・さくらんぼみたい。
ゲロは奇声をあげて
「あちち、外はこんがり！中はトロトロ！」
などと高らかに歌い上げ、オペラ界に新たな時代を予感させる。
あたしの頭が１．５センチくらい割れたので、慌てて頭を両手で力まかせに閉じながら、
「ヘンタイ！変死体！そうめん！モノレール！」
「頭が１．５センチくらい割れて味噌、ゴマ、山椒を出す方が悪い

んだよ」
ゲロは体を炎に包まれながら、公園の中をまだ取れたばかりのエビの様にのたうちまわりだした。
下呂武は、あたし達と同じ六年一組。
このゲロは小さい頃の付き合いでもう8年。
昔はすごくいい子で角砂糖をあげれば殺人以外なんでもするほどだったのに、最近は少しいじわるになったの。
ゲロのアサリ仲間が、あたしとゲロがいつも一緒に帰るのを見て。
「お似合いのカップルだね」
なんて言うもんだからゲロのやつ。
「アバジャラジュランジャモ」
なんて聞いたこともないような言語を喋りだして、それから少しあたしにいじわるになったってわけ。
「かっこいいよね、ゲロって」
佳代ったらあの意味不明の言動を繰り返すゲロのことが好きなのよ。
「どこがかっこいいのよ？アサリ持って聞いたこともない言語喋るだけよ？」
「かっこいいじゃん・・・名前とか」
そこであたしは数十年先の宇宙開発をにらんだ長期ビジョンを持ちながら突っ込んだ。
「名前かよ！もっと他にないのかよ！」
「じゃあ、ゆりはどんな人がいいの？」
って佳代がたずねた。
「あたしはね・・・」
味噌をいつも手づかみで食べてて・・・あ、だからいつも手は味噌だらけ。
あと、女の子にやさしくて。
女の子をみたらすぐに、ごく自然に片栗粉をぶつけてくるような子がいいな。
「どうぞ！」

粉を頭の上からかけられた。
「えっ」
あたしは、粉をかけている相手の顔を見た。
見知らぬ男の子が、あたしに粉をかけてゆっくり歩いたり片足立ちをしたりパフォーマンスして笑ってる。
すごくハンサム、とにかく素敵な男の子。
しかもこの粉、片栗粉じゃない？
よく見たら、椅子を背中にしょってるよ！
佳代も模酢、他の子たちもこの正体不明の男の子が誰なのか尋ねあっている。
ドーピング検査の結果誰も知らないことがわかったの。
そこで、あたしが声をかけようとした瞬間。
彼の方から
「片栗粉でとろみはついたかい？」
って言ってあたしを見つめたの。
そこいらのいかにも汚らしい野良おじさんに見つめられたりしたら、気持ちわるいけどこの子に見つめられると、まるで雄のチンパンジーの瞳に吸い込まれて、妖精の住んでる四次元空間の端の端のファンタジーゾーンの前半９ホールを終え、１バーディー、２ボギーでノンストップで行ってしまいそう。
「ところでキミ、肘が少しビッシングぎみよね」
って言ってあたしの肘を、持ってた椅子でフルスイング！
でもみねうちだから痛くない。

第三話　転校生

「ほら、椅子を振るときこうやって腰をくるっとしなきゃダメ。腕の力だけでは椅子はうまく振り回せないよ。足は少し浮かせて、体重を移動しやすくして！膝は柔らかく使って！毛穴の黒ずみの原因となる余分な皮脂を吸い上げて！豚骨を粉砕してうまみを搾り出した濃厚なスープにタマネギやニンニクの風味を加えて！」
彼の言ったとおりにしたら、なんだか力が抜けてコンパクトに椅子を振り回せるようになった。
燃え盛る炎の中も気にせず歩けたのよ。
もちろん少しは燃えたけど・・・木造二階建て延べ七十五平方メートルを全焼。
これはあたしのせいじゃなくて、風のいたずらみたいなところあるからね。
それはそれとして、こんなに椅子を振り回せたの、はじめてよ！
彼は炎の中で椅子を振り回しながらやってきて。
「ところでなんで、なんの目的で炎の中なんて歩いてるんだい？炎が好きなのかい？」
って笑いながら言ったの。
ちょっとなんて素敵な笑顔なの！
「なんで炎・・・お前の胸に聞いてみろ」
「はい」
ってニコニコしている。
「聞いちゃったよ！」
あたしは言った。
「シモドロコンジョ」
いつのまにかゲロがあたしの３センチ前に立っていた。
彼は。
「シモドロコンジョってなんだい？」

ゲロは普段は暖かい海域の水深百メートル前後に分布しているみたいな顔をしているけど、今は醤油と油のしみこんだみたいな感じになっている。
「シモドロコンジョってなんだいって？おまえ・・・チャーハンのことじゃないか」
シモドロコンジョってチャーハンのことだったんだ、あたしはてっきり次世代家庭用ゲーム機のことだと思ってたのに・・・。
「チャーハンならつじつまがあうね」
彼はニコニコしている。
模酢が。
「つじつまあっちゃったの！？」
彼があうって言うんだからいいじゃないの、模酢ってば細かいこと気に過ぎガールだから麻酔銃で眠らせて、森に返してやりたい。
「よし、おまえ俺と相撲で勝負しよう」
なんてゲロが言い出しただけど。
ゲロはとにかく強いのよ、彼がひどい目にあっちゃうよ。
「いいよ。じゃあ」
っていった瞬間、彼はゲロを椅子でフルスイング！
でもみねうちだから大丈夫。
勝負はよりきりで彼の勝ち。
彼は。
「じゃあね」
って言うとあっという間に走っていってしまったの。
あたしと模酢と佳代はただその様子を見ていた。
あとゲロは地面で寝ていた。
のんきなやつだよ、まったく。
翌朝のシュメール私立パレンケ小学校、六年一組の教室。
昨日はあの、謎の男のことばかり考えちゃってすっかり宿題のこと忘れちゃったのよね。
今朝は大慌てってわけ。

「えーっと一般相対性理論ってなんだっけ？」
「時空四次元が重力でゆがめられたのを曲率であらわしたやつだっけ？」
「じゃあ、重力場の方程式と、アインシュタインの運動方程式ってなんなの？」
模酢や佳代も宿題を忘れて、三人でない知恵をふりしぼってるのよね。
「そんな問題で苦しんでいるの？まったくレベルの低い連中」
と言って、あたしたちのことを薄汚いものでも見るような目で見たのは花島真横！
成績は優秀で、見た目もかわいいんだけど中身はドブよりも汚い女。
「くく！レベルが低いって何よ！」
佳代が少し声を荒げて言った。
そうよそうよ、レベルが低いなんてひどいんじゃない！
「レベルが低いのはゆりだけよ！」
「まったくよ！」
「認めちゃうの！？そこは認めなくてもいいところだよ！」
模酢のおきまりのつっこみ。
「もう、そのくらいにして。先生がくるわよ」
クラス委員長の尾田悦子が静かに言った。
尾田さんは責任感の強いがんばりや。
みんなからの信頼も厚い。
顔の皮膚も厚い。
「ほら、私のノート写していいわよ」
「本当にいいの？ニューメニア語で写して」
ニューメニア語とはあたしが独自に開発した、宇宙のどこかにいるはずのニューメニア人と会話するための唯一の言語なのだ。
「じゃあ、あたしはモロスリ語で写すわ」
このモロスリ語と言う言語は、佳代があたしの許可もなく勝手に作った邪教の言葉。

「いや、二人ともその何とか語で宿題写してもいいけど・・・たぶん先生読めないわよ」
そういや先生、ニューメニア語読めないんだっけ・・・本当に使えない先生よね。
ニューメニア語読めなくてよく先生になれたもんよ。
「もう、二人は勝手にして。あたしは日本語で写させてもらう」
模酢はもくもくと悦子のノートをうつしている。
あたしたちがノートを写し終えた頃、担任の本多先生が教室に入ってきた。
本多先生は５０歳くらい。
いつも見えない敵に向かって戦いを挑んでいる、ごく普通のなんの個性もないつまらない先生なの。
その本多先生の朝のＨＲの時間。
本当につまらないのよね。
「えー今朝は倒すか、倒されるか、格闘技の原点のような一日にしてほしい！先生はそのために体を触るなど、わいせつな行為をする準備がある」
いつもならこの挨拶だけで終わりだが、今日はさらに続いた。
「あと、君たちに新しいお友達を紹介しようと思う」
転校生！？いったいどんな子かしら？楽しみ！
「お父さんの仕事の都合で、転向してきた。紳麻正信」
先生にそう呼ばれると、「はい」という返事と一緒に、教室に男の子が入ってきた。
あたし、佳代、模酢、ゲロはその顔に見覚えがあった。
あたしは。
「あー昨日の！ヘリコプター」
佳代は。
「お母さん！」
ゲロは。
「真犯人はＫだ」

模酢は。

「一人としてあってねえ！なんだよヘリコプターって！？人間ですらないじゃないか！お母さん、間違えるならお父さんだろ！それでもおかしいけど、百歩譲って！真犯人も何も犯人ってなんだよ！」

第四話　大型、小型

「あーっ」
彼はこっちを見て、手を振った。
「なんだ？彼を知ってるのか？」
本田先生は不思議そうな顔であたしたちを見ている。
転校生は昨日のあの子。
あたしに椅子の振り回し方を教えて、ゲロを椅子でぶん殴ったあの男の子。
一時間目の休み時間。
あたし達は、窓際の一番後ろの紳麻君の席に集まっていた。
「へーアメリカからきたんだ・・・」
「アメリカじゃないよ・・・アメリカの方からきたんだ。右の方だよ」
こんな素敵な転校生と知り合いなんて、すっごい自慢。
鼻高々！
二メートル位鼻が伸びた。
最近の整形の技術の進歩はすごい。
みんなのうらやましそうな顔ったら、まるでぶつぎりにした玉ねぎみたい。
「マサノブって呼んでよ。右の方でもそう呼ばれていたから」
「わかったわ、ヘリコプター！」
「全然、わかってないじゃん！」
模酢がつっこんだ。
だってどう見たって、ヘリコプターなんだもん。
それにヘリコプターってかっこいいから絶対気にいると思うんだ。
「じゃあ、マサコプター」
「それなら、僕のイメージにぴったりだ！」
「ぴったりなの！？」

っとまた、模酢がつっこむ。
そこにゲロが一番近い駅からバスに乗って一時間みたいな顔してやってきたの。
これは、すこしやばいかも！
だって昨日、相撲でマサコプターに椅子で頭をフルスイングされちゃったから・・・さては復讐するつもりなのね。
「たしか、紳麻正信って言ってたな」
ゲロがマサコプターを見下ろしながら言った。
「紳麻正信じゃないわよ、マサコプターよ！小型のマサコプターよ！小型ってことは大型のヤツもいるってことだからね！」
「・・・小型とか大型とかすごいどうでもいいよ！」
模酢が絶叫！
「小型だと！？大型にはない利点があるとでも言うか？」
ゲロは唇を震わせた様子で、第2形態に変身するかのような顔してる。
「小型に興味しんしんかよ！」
「まず、わかってほしいのは従来のマサコプターに比べて、小型マサコプターは同じ容積で空気に面する表面積が圧倒的に大きいの。そして効率の向上、リスクと重量の低減、コストの低減、隠しキャラの条件の厳密な制御、革命的な方法をもたらすなど数多くの利点があるわ」
ゲロも他のクラスメートもポカンと口を開けている。
「僕にはそんな秘密があったのか・・・」
マサコプター自身もビックリして、３ケタ生きている人みたいな顔であたしの顔を見ている。
あんまり見られると恥ずかしくて、ボーッ！
「小型には小型の利点がある。ってことは大型にはどういう利点があるんだ？」
「今度は大型の利点かよ！？どうでもいいだろ！」
模酢がつっこみわめく！

「もちろん大型には大型の利点と言うもがあるわ。まず、マサコプターについて知ってもらいたいわ。マサコプターは、北関東のとある町の海辺に広く分布して生息しているが、人間が居住する地域に近づくことはほとんど無いの。無人露店で夏を過ごすマサコプターは、春はあけぼのし始めると海岸に出てくる。好物のエンジンブレーキを追って大容量蒸気タービンの海を渡って行くからよ。北関東のとある町は、このマサコプターの移動ルートに位置している世界で唯一の町。見た目は可愛くてもマサコプターは凶暴な性格なのよ」

「僕って北関東の、とある町の海辺に広く分布して生息していたのか・・・」

「信じている！？ムチャクチャもいいとこじゃないか！」

模酢がつっこみはじけとぶ！

「マサコプターについてはよくわかった。で、大型の利点を教えてくれよ！」

まったくゲロの大型を求める底知れない欲望はどこから来るのかしら？

「大型マサコプターの一番の利点は大容量の一言につきるわね。超々臨界圧大型蒸気タービンによる、蒸気条件の高温・高圧化，および効率の向上。性能・信頼性・運転・保守性の各評価項目に対しては、小型が及ぶところではないわ」

「どっちのマサコプターにするか迷うな・・・」

「そう言えば昨日のマサコプターの椅子振り回すとこ、かっこよかったわ」

佳代は興奮して顔を赤らめた。

こんな大型とか小型とかどうでもいいのよ。

そうだ、思いきって言ってみよう。

「マサコプター、あたしに椅子の振り回し方教えて」

マサコプターは少し笑って、「いいよ」あたしは思わずうれしくて、踊りそうになっちゃった。

するとそばにいた、佳代が急に立ち上がって

「ねえ、あたしも椅子を振り回したい！だから一緒に入れて！模酢もゲロも一緒にやろう！」
「えっっ！？あたしも？」
模酢はなぜだか顔をすごくしかめたけど、ゲロはうれしそう。
「みんな大歓迎だよ、椅子を振り回すのは多い方がいいってネ」
ってニコニコしたマサコプター。
そこに真横がおともの者達を従えてやってきた。
いつ見てもまるでトンコツ、みたいな顔して・・・
「子供達だけで、椅子を振り回すような危険な遊びしていいと思っているの？」
もう、完全にそれって言いがかりよね。
「自分達だって、ついこないだまで椅子を振りまわしていたくせに」
「うるさい！二度と口を開くな！だからその口に、蓋をつけなよ、しかも鉄製のヤツ！硬くて重いヤツがいいわ！どうせもう空けることないんだし、溶接しちゃいなさいよ」
マサコプターはそんな険悪な様子を見て。
「危険な遊びって、椅子を舐めること？それとも椅子に火をつけること？ちゃんと練習すれば危険なんて全然ないよ。むしろ、普通に暮らすよりすごく安全だよ。安全ってこういうことなのかってことを肌を持って知ることができるよ！」
真横はマサコプターに見つめられて、生意気に照れてる。
「そんなこと言っても、椅子を振り回したやっぱり危ないわ！ケガするわよ」
「ケガしないように振り回す方法を教えるよ。どうだい、君たちも？」
こいつも誘うの？
「あたし達はいいわ！そんな低レベルなお遊びにはつきあってられないもの」
真横は薄笑いを浮かべると、おともの者達といっしょに教室から出て行っちゃた。

第五話　レモン

ふう、助かった。
あの嫌な真横と一緒じゃなくてよかった。
とにかく、あたし達とゲロはマサコプターに椅子の振り回し方を教えてもらうことになった。
と言うわけで、あたし達は学校が終わると毎日団地の近くの公園に集まって椅子を振り回す練習をするようになったの。
まず最初にマサコプターが言ったのは、薄切りレモンで頭を守ること。
「なんで薄切りレモンなの？」
あたしは思わず聞いちゃった。
「レモンは、ミカン科の常緑樹で、インド北部（ヒマラヤ）が原産地なんだ。１本で１００個から１５０個ほどの果実が採れるんだ」
「一本の木からそんなにとれるの・・・それならここ一週間のできごと全部納得いくわ」
あたしは思わず息をのんだ。
「なんで納得してるの！？意味がわからないよ！レモンで、なんで頭を守るのか全然説明してないじゃん」
模酢が軟らかくジューシーにわめく。
「そのことが聞きたかったのか。レモンはすごく酸っぱくて、pHは2くらいあるよ。　ジュースにしたり、果汁はレモネードとかね。揚げ物にかけたりすることもあるね。ビタミンが多くて美顔用の材料にも使われているね」
「美容にいいなんて素敵！レモンを顔に埋め込みたい！ＤＮＡにレモンを組み込みたい！」
佳代は肩や腰など決死のフル回転。
「美容にいいのはうれしいんだけど・・・全然、レモンで頭を守る説明になってないじゃん！？さっきからずっとレモンの説明ばっか

りじゃないか！」
模酢は叫んだ。
「そっちか・・・うっかりしいてたよ。レモンの皮を砂糖で煮たものに、グラニュー糖をまぶすとレモンピールが作れて、ケーキなどに使われるよ。輸入されたレモンには輸出時に発癌性のあるポストハーベスト農薬をかけられるので、食べるときは注意してね」
「まぁ、怖い」
「怖いといえば幽霊よね」
あたしと佳代は、意識ははっきりしており、外傷もなかったけどブルブルと震えちゃった。
だってあたし幽霊とかすごく苦手なんだもん。
「じゃあ、そういうわけで。レモンの薄切りつけてね。頭は打ち所によっては大変なことになるからね・・・ヤギが」
「ヤギが！？」
ヤギが大変なことになると聞いて、みんな薄切りレモンを頭にのせた。
「ヤギが大変なことになるから薄切りレモンのせるのかぁ・・・なんでヤギ！ってか頭、全然守れてないよ！薄切りレモンくらいじゃ何もないのと変わらないよ！」
模酢が訴えた模様。
「あとは、肘と、膝にもくっつけてね。もう、これには意味とかないけどノリの問題だから」
「ノリなんだ・・・」
そういうマサコプターは何もつけてない。
あとで聞いてみたら、レモンなんて頭や、肘や膝につけているなんて馬鹿みたいだからだそうだ。
そしてマサコプターはお金持ちのおぼっちゃまらしいの。
でも全然、鼻にかけないし、すごくやさしい。
「椅子を振り回すのが早くうまくなるために必要な物が二つあるんだ。ひとつはお金！もう一つは才能！」

「あっ・・・う・・・」
模酢は思わず絶句。
でも本当のことだからね。
あたしもマサコプターの言ってることが正しいと思う。
「おまえらみたいな者は、金もなければ、才能もないんだろ？」
「はい！ありません！」
あたしと佳代とゲロは声をそろえた。
「すごい認めた！なんでみんなそんな卑屈になってるの！？」
「いい返事だ！特別に僕が日本銀行に無断で発行した、お金をあげよう。いずれこのお金が世界の基軸通貨になりえるポテンシャルを持っていることは、君たちみたいな人たちでもわかるよね？」
「はい、わかります」
あたしと佳代とゲロは声をそろえた。
「それたんなるニセ札だよ！ってかキャラが急に変わりすぎだろ！？」
っと模酢が言ったと同時に
「おい！ここは俺たちが野球する場所だ」
やってきたのは同級生の菊山。
野球道具をおろすと、球場を作り始めたりしてる。
「僕達が先に使っていたんだけど」
マサコプターが穏やかな口調で言ったら、菊山のヤツ
「椅子なんて日本海側の一部を除きほぼ全国的にどこだって振り回せるだろ！」
だって。
「車が通るところではできないだろう」
「野球は心を豊かにしてくれる！野球があるから地球に酸素があるんだ」
なんて言うもんだから、あたしは完全に頭にきちゃった。
「やってもいいよ。総合ルールなら絶対に負けないから」
と言ってあたしは指をポキポキならした。

第六話　コブラ

「まぁまぁ、お金持ちの僕にめんじてここは引いてくれないか。それに今日は僕たちが先に使ってたんだ」
お金持ちのマサコプターにこう言われては、菊山もうつむいちゃって。
「お金持ちに言われちゃしょうがない。でも、先に使ってた者が使っていいんだな！みんな、いくぞ」
そう、捨てせりふを言うと仲間達と去っていった。
「しかし、あいつらレモンの話ばっかりしてたわね！」
「してないよ！？何聞いてたんだよ、ゆり！」
と模酢。
「そうよ、レモンじゃなくてタモリの話でしょ？タモリの、はなもげらの話！」
「もっと違うよ！今までの会話の中で一度としてタモリなんて出てきてないよ！」
「・・・奴らも馬鹿じゃない。明日は何か考えてくるだろうね・・・タモリのことを」
マサコプターが、腕組みをしてつぶやいた。
「タモリ！？いや、そうじゃなくて、場所取りのことでしょ？先にとった者の勝ちって言ってたから、多分明日は早くからきて場所とるつもりなんだよ！」
模酢が身振り手振りをつけて説明した。それが踊ってるみたいでおかしいの。
「それはないよ。タモリ」
あたしは言った。
「あたしはタモリじゃないよ！」
模酢は大慌て。
「怒るところがかえってあやしい！」

佳代はじろりと見る。
「大体、そのサングラスでタモリじゃないなんて言ったたって説得力ないぜ」
ゲロがクビを横に振った。
「かけてないよ！？サングラスなんてかけてないよ！見えるとしたらお前だけに見えるサングラスだよ！ってか妄想だよ！」
翌日の放課後、あたし、マサコプター、佳代、模酢、ゲロは一緒にいつもの公園に、先端の金具を外した電動ドライバーを2時間近く回転させせやってきたの。
昨日の絶滅の危機にひんしている菊山が言ってたことが気になってね・・・。
あいつ、先に使ってた者が使っていいんだな！って言っていったでしょ。
だから、今日は授業が終わったと同時に先端の金具を外した電動ドライバーを2時間近く回転させながらみんなで公園にきたってわけ。
「どうやら菊山達きてないみたいだね」
「あいつら先に使ってた者が使っていいなんていってた割りには・・」
なんて話して椅子の準備をしていると、口から汁が漏れている菊山がやってきた。
「遅いんじゃないの、ここはあたし達が先に使ってるわよ」
「おいおい、よく見てくれよ俺の口から漏れてる汁を。あと先に使っているのは俺たちだよ。俺たちのメンバーがもうそこにいるじゃないか？」
そう言って菊山が指差したのは空き缶。
「何よそれ！空き缶じゃないの！」
「お前らにとっては空き缶かもしれないが、俺たちにとっては大事なメンバーなんだよ！」
とか言って空き缶を抱きしめたの。
「それで、その空き缶が先にいたから公園を使わせろってこと？」

模酢はあきれ気味。
「そのとうりだ！この空き缶、コブラ（３０）って名前なんだけどな。こないだの試合でも３打数５安打、５得点のもしたんだぜ」
「３打数しかたってないのに５安打できたの！？」
マサコプターは大慌て。
「ああ、コブラだからな」
「全然説明になってないだろ！」
模酢のつっこみ。
「でも、空き缶でしょ」
佳代はたまに冷めたこと言うのよね。
「見た目で判断するな！見た目は空き缶に見えるかもしれない・・・っていうか空き缶だ。でも、俺たちにとっては大事なメンバーだし、友達なんだ。お前たちは、姿形で友達になるのか？違うだろ？心と心が惹かれあう！それが友達なんだ、それがたまたま空き缶のコブラだった・・・それだけのことだ」
「菊山・・・正直、意味が全然わからない」
だって全然意味がわからないんだもの。
「そうだね、意味がわからない」
「意味というか菊山がわからない」
「菊山がなぜ存在してるかわからない」
「存在はいいだろ！？」
「とにかく公園は俺たちが使わせてもらうぜ」
「うん。いいよ。なんかキモイから」
そうあたしは言うと、
みんなと一緒に公園を出て行った。
みんなで当てもなく歩いていると。
「ね、二丁目まで行ってみない？あそこならまだ空き地とかあると思うよ」
佳代が元気いっぱいに叫んだ。
「そうだね。そこ行ってみよう」

二丁目は何年か前までは開発も進んでなくて、空き地だらけだったんだけど、最近では家がたくさん建って、すっかり景色が変わっていた。
「ここもダメみたいだね」
あたしたちは空き地の前でため息をついた。
空き地にはどこにも立ち入り禁止の立て札立てられている。
「昔はここでフランス人の評論家とりとかしてたのに」
と、佳代。
「カブトムシ感覚でフランス人の評論家とってたもんね」
とあたし。
「フランス人の評論家とってたの!?ってかフランス人の評論家ってそうそう見ないぞ!」
と模酢。
いろんなところ回って探したけど、案外見つからない物ね。
もう何もかも忘れて、腐敗し発酵してしまいたいなんて思ったりもしたんだけど。
「おーい見つけたぞ」
あたしたちと別れて違うところを探していた、ゲロとマサコプターが呼んでる。
あたし達行って見ると・・・

第七話　バッタ兄さん

「ここなら、思う存分椅子が振り回せそうね」
「俺はもう我慢できない、椅子を振り回すぞ！」
ゲロは早速、人間の子供で言えば１１歳ぐらいとほとんどかわらない椅子を振り回した。
「ここはあたしたちの空き地よ」
あたし、佳代、模酢は、おおはしゃぎして空き地に突撃！
止まらないわ！
これから学校が終わったらここに集合よ！
「ここは僕たちの場所だ！もしくは僕の土地だ！」
「いや、土地は持ち主がいるだろ！？」
「俺は認めねーぞ！」
「知るか！」
「ここに秘密の基地を作ろうよ」
「豚肉で作ろうぜ」
「気持ち悪いよ！牛肉にしようよ」
「どっちも変わらないだろ！」
みんな大盛りあがりで、人間の歴史を振り返っても今まで存在しなかったようなポーズを決めている。
「じゃあ、あたし。基地の材料今度来る時もってくる！ジャガイモでしょ、生クリームでしょ、パルメザンチーズでしょ、それにイタリアンパセリもね」
「何を作る気だよ！」
「ゆり！塩を忘れてるわ！」
と佳代。
「いっけねー」
あたしはペロリ舌を出したり引っ込めたりして、みんなができだけ不快になるようにしてみたわ。

「塩とかそういう問題じゃないだろ！？その材料では基地なんてできないよ」
「いや、これだけの材料があれば平屋の一戸建てくらいはできるだろ」
ゲロはしみじみ言ってんの。
「どう、想像したらそうなるんだよ！」
模酢が叫ぶ。
「・・・ジャガイモのグラタンができるじゃない！その材料があれば！」
「えええ！基地の材料でジャガイモのグラタンができるですって！」
佳代はあまりにもビックリして腰を抜かすどころか、腰が爆発して二キロ先まで吹っ飛んだ。
「基地はできないけどね」
「ジャガイモ！ジャガイモ！」
急にマサコプターが椅子をふりまわしながら騒ぎ始めた。
うわー、ゴッキゲン！だんぜんステキ。
「意味がまったくわからないよ！」
確かに意味はわからないけど、あたしは一緒に叫んでた。
「ジャガイモ！ジャマリル！ハンゴメ！ハンゴロシ！ハンゴロシ！」
その時、いきなり空き地の脇のドブの溝から。
「何、騒いでるんだ！」
痩せた顔にメガネかけた、バッタみたいなお兄さんが叫んだの！
もう、びっくりして万引きGメンに捕まった時の犯人みたいな顔になっちゃったの。
「ゲロどうしたの？」
ゲロなんて・・・今はもう動かない。
あたしたちはあわててゲロのまわりに集まったの。
バッタみたいなお兄さんは。
「どうした？」
とも聞かずに何か言ってる。

バッタ語なのでよくわからないけどね。
「こんなところで騒いでいるからいやだなぁこわいなぁって思ってフッと見たらグワッとなるんだ！ウワァッ！と思いましたけど、そう思った瞬間スーッと何かな～何かな～いやだないやだないやだな～と思いながら自業自得なんですよ、ええ」
もう、わけわかんない。
あたし達は、バッタ兄さんのおもしろい顔に見とれていたんだけど。
「山見さん！」
っと呼ばれて振り返ってみたら、尾田悦子が手を振っている。
「家がすぐそばなの、こっちにいらっしゃい」
みんなはゲロを蹴飛ばして、いそいで尾田悦子の家に入った。
蹴飛ばされたゲロも偶然、尾田悦子の家に入った。
「あのおにいさん。バッタの生まれ変わりみたいでしょ？いつもドブにいるの」
ゲロが床に置いてある横で尾田悦子が言った。
尾田悦子の家は全体的に薄汚れた感じの大きな家。今はリビングでゲロの様子をみんなで見ているの。
「ゲロ動かないね」
佳代は神妙な顔で言った。
「動かないんじゃなくて・・・動けないんじゃないの」
「同じことだろ！？」
こんな時でも模酢が突っ込む。
「それはそうと。あんなおにいさんがいたんじゃ、あの空き地は使えないな」
マサコプターはため息をついて、尾田悦子の家の壁に餃子って大きな字を書いた。
そういえば餃子たべたいなぁ。
「それなら大丈夫。あのお兄さん昼間はいない。ドブに帰ってくるのはいつも五時くらいだから」
「じゃあ、時間さえ気をつければいいわけね」

あたし達は歓声をあげて喜んで、ゲロを蹴っとばした。
だって床でごろごろ寝てて、じゃまなんだもん。
存在もじゃま。
「って言うかさっきの餃子はなんだったの！？」
さっきのマサコプターの字を指差して模酢が突っ込む。
「意味とかはないけど・・・そういう名前の食べ物があるんだよ」
「知ってるよ！餃子は知ってるけど、なんで急に書いたかがわからないんだよ。尾田さんも怒りなよ、家にいたずら書きされたんだよ」
模酢が怒っている。
「いいのよ、模酢さん。だって餃子じゃない」
「・・・だっての意味がわからねー！？」

第八話　コンソメにクリームを混ぜたソース

「それよりもう5時半よ」
みんなは帰る準備を整える、あたりはもうお先真っ暗。
「ところで、たまには僕たちと一緒に遊ばない？」
「おまえらみたいな人達とは遊べない」
そう言うと尾田悦子はあたし達に唾をはきかけた。
ゲロはなんだかわからないけど、また動き出した。
気持ちが悪い顔だ。
それからあたし達は授業が終わると、毎日あの空き地に飛んでいった。
飛んでいったって言っても実際は飛んではいないわけだけどね・・・
気持ち的には飛んでいったみたいなそんな感じ。
実際少しは飛んでいたかも知れない、二センチくらいなら飛んでいたかも知れない。
さいわい空き地の近くには、パレンケ小学校生は尾田悦子以外ほとんどいなくて空き地はあたしたちがあそこを独占できた。
今回の空き地の件を参考にして独占禁止法について簡単に説明するね。
みんなの周りに空き地は、よりよい空き地を作るために競争をしているの。
別に競争なんて必要ないんじゃないかって思うよね。
じゃあ、競争のない世界を想像してみて。
空き地に入るために二時間待ち、ここはあのアミューズメントパークか！？
せっかく入れた空き地だけど、遊ぶスペースがないくらい物が置いてある。
なんだ、この空き地は！
こんなところにはいられない！

ほかの空き地に行ってやるってみんな思うよね。
でも競争がなければ、どこの空き地に行ってもおなじことなの。
こんなことないように独占禁止法はあるの。
そして事業者が競争をすると、あたしたち消費者はよりよい空き地で遊ぶことができるわけ。
まぁ、はっきりいって今回に関して言えば独占禁止法はまったく関係ないけどね・・・。
自分でもなんでこんなことを口走っちゃったのかまったくわからないよ。
リズミカルに反省。
毎日空き地で椅子を振り回す練習して、学校でも今日はどんな椅子の振り回し方するかマサコプターを中心にして話し合うの。
その会議の楽しいことと言ったら！
もうほかに形容しがたいんだよ。
あたし、椅子をすごく振り回せるようになったんだよ。
ジャストアタッチメントもできるし別荘返しもできるし、ラッキーブリッジもできちゃうんだから。
マサコプターやゲロみたいにはうまく振り回せないけどね。
今日は、オリーブエレクトロン・ヴォルトに挑戦する予定なんだ。
早く放課後にならないかな。
給食を食べ終わった頃、あたし達のところへ浦澤さんて言う子のグループが浮かれてやってきた。
浦澤さん達はレバー料理のような雰囲気。
成績も見た目も普通、あたかも七月のシベリア横断の旅から帰ってきた若者がいささか大人びて帰ってきたような印象とでも言っておこう。
「あたしたちも一緒に椅子を振り回したいんだけど・・・」
ってあたしの顔を、変にいじくりまわしたりせずに言った。
みんなもあたし達と一緒に遊びたがってるってみたいだなって思ってたんだよね。

椅子、振り回すのって本当に楽しいし、なによりマサコプターにみんな興味があると思うし。
ついにきたって感じよね。
浦澤さん達がそう言ったのをきっかけにしたように、
「あたしたちも！」
「じゃあ、俺も！」
「俺は？」
「おまえは？」
「おまえは俺ですか？」
「俺はおまえではないので大丈夫です」
「いいよ！みんなで、椅子を振り回そう！」
みんなで振り回すのは楽しいと思うけど、ちょっと複雑なのよね。
せっかくできた、あたし達の秘密基地がなくなっちゃうんだもん。
少し心が狭いかな？狭いって言っても、そんなには狭くないよ！
八畳位はあるからね、すごく快適に過ごせるくらいのスペースはあるよ。
でも家具がどうしても増えてくるわけだから、どうしても少しは狭くなってくるのはいたしかたないよ、それをどうこう言われちゃうとあたしとしても少しカチンとくるのよね。
五時間目の英語の時間が終わって、六時間目は学級会議。
学校のくだらない行事を決めたり、クラスとんでもない決め事を作ったりするの。
まぁ、あたしとしてはあまりやることのない時間。
机をひっくり返してやるんだ。
議長の尾田悦子に指名されても。
「黙秘します」
の一点ばり。
すると花島真横が手を上げた。
「はい、花島さん」
尾田悦子に指名された、花島真横は勢いよく立ち上がりよく響く声

で。
「最近、家に帰らないで遅くまで遊んでいる人がいます！その人たちは椅子を振り回すような危険な遊びをしています」
ちょっとそれってもしかしてあたし達のことじゃない？
花島真横は、あたし達の方を見た。
その顔が憎たらしく、憎たらしさに対する感受性が人一倍ナイーブなあたしは突然変異を起こしそうなほどアタマにきてしまった。
尾田悦子の横で見えない敵と戦っていた本田先生は。
「椅子を振り回す危険な遊び？誰のことだい」
「ブタの脂身を振り回してるのは僕たちのことだ！」
マサコプターが立ちあがった。
ブタの脂身なんて振り回したことあったっけ？
「ブタの脂身の話なんて出てきてないだろ！？」
模酢は頬をすこし赤く染めて立ち上がって突っ込む。
マサコプターはポケットからブタの脂身を取り出すと、本田先生の口にねじ入れた。
「味つけは、塩をお好みの量で召し上がってください」
「食べさせちゃったよ！なんで、そんな物、もってんだよ！」
「おお、この脂身の甘いことといったら・・・まるで角砂糖を十二個口の中にいっぺんにいれてるようだ。しかも脂身のもつ独特の臭みが、まったく消されることがなく。臭いよ。それに火を通してないからニチャニチャと歯にまとまわりついてきて、不愉快」
「すごくまずいことは伝わってくるな・・・ってか意味わかんないよ！」
模酢の突っ込みです。
「つまりアレだな、ブタの脂身を食べてわかったんだが、椅子を振り回すのは危険だな」
「なんでー！？」
「そんなことありません！」
と怒った様子でマサコプター。

あたまから椅子を振り回すことが悪いって決め付けちゃって！
それは確かに椅子本来の使い方からしてみたら少し違うかもしれないけど、だからって否定してばかりでは新しい物が生まれなくなってしまう。
「先生は・・・感心できないな」
本田先生なんて大きらい！
学級会議が終わったあと、さっき椅子を振り回すのに入れて欲しいって言ってきた浦澤さん達やってきて。
「やっぱり、椅子振り回すのやめる。危ないもの」
って言ってきたの。
佳代はしいたけとマッシュルームが混ざったような顔で。
「先生がうるさいから？それとも私が危ないのかい？」
「両方」
浦澤さん達は口をあけたり手を伸ばしたり、床の上をごろごろと転がっていた。
水曜日の朝。
椅子を振り回してるせいで成績が下がった、なんて言われるのがイヤだから今日から毎日、早く学校にきて授業が始まる時間まで勉強することにしたの。
するといきなり、花島真横達のグループが教室に走りこんできてあたし達のグループを見つけるやいなや。
「こんなところにいたのね！」
そう叫んで
「これでも食らえ！」
コンソメにクリームを混ぜたソースをかけた！
「うげぇええ」
「みぎゃー」
「ぎにやぁぁぁ」
あたしたちの服がおいしそうな匂いをあげた。
あたしの着ていたおニューのピンクの甲冑が大皿料理みたいになっ

ちゃったよ。

第九話　店主！店主はいないか！

「コンソメにクリームを混ぜたソースをかけるなんて人としてあるまじき行為だぞ！俺は遺憾の意を表明する」

ゲロはたまたま持っていたレンコンで自分の鼻をブン殴りながら怒ってる。

気持ち悪い顔だな。

「何言ってるの！怒りたいのはこっちよ！」

真横がレンコンの穴に詰まった。

そしてランドセルを放り出すと、中にはココンソメにクリームを混ぜたソースが詰まっていた。

「わぁーおいしそう。まるで夜空に宝石をぶちまけたようだわ」

「何とぼけてるの？あんた達がやったんでしょ！」

こんなおいしそうな料理を、あたし達が作ったって言うの？

どういうこと！？

あたしは、あたしの知らない内にシェフになり料理をしたってこと？

「あたし達がコンソメにクリームを混ぜたソースをランドセルに詰めたってこと？」

あたしはレンコンに詰まった真横をレンコンから引き抜いた。

真横は二センチくらいで細く長くなっていた。

「よくもそんな口がきけるわね！昨日、あたしが塾から帰るとき、後ろから近いづいてきて、いきなりコンソメにクリームを混ぜたソースを作って、それをあたしのランドセルがいっぱいになるまでいれたんじゃない！」

真横はランドセルを見せた。

「ちょっと待ってよ。それじゃあ、いったいこの中の誰がやったっていうのよ！」

模酢が真横に食ってかかった。

「さぁ、目の前で作ってたけど、顔までは見なったわ。顔ってそん

なに重要？」
「重要だろ！？なんで目の前で作ってる人の顔見ないんだよ！」
「顔なんってどうでもいいのよ！こんなことする人なんてあんた達くらいしかいないのよ」
いくらなんでも暴論すぎるよ。
でも、今そういうことする可能性が高いのはあたし達しかいないんだもん。
そこに尾田悦子がわって入ってきた。
「まだ、山見さんがやったって決まったわけじゃないのに決め付けるのはよくないわ。たぶんやっているんだろうけどね・・・いや、絶対にやってるね」
「そんなこと言ったって」
「どうしたんだお前ら！」
ちょうどその時、本多先生が教室に入ってきた。
本多先生は偶然持っていた野菜に、コンソメにクリームを混ぜたソースをかけて口に放り込んだ。
「うほっ、うまい」
尾田悦子はいままで何があったのか話した。
本多先生はそんなことどこ吹く風で、コンソメにクリームを混ぜたソースがかかった野菜のぶつぎりを口に放り込んだ。
「うぬぅ。玉ねぎに、にんじん、ナス。どこにでもある野菜だな。しかし、このコンソメにクリームを混ぜたソース！これが野菜になんともいえぬこくのある味を出している。野菜のうまみを破綻させることなく、優雅でいて典雅な味わいが口の中を駆け巡る。店主！店主はいないか！」
その声に教室の前のドアから店主があわてて入ってきた。
「はい！私が店主です」
「そうか！店主にひとつ尋ねたい。コンソメとはなんぞや！」
「コンソメ・・・ですか？」
「そうだ、コンソメだ」

「コンソメとはトンカツです」
「ほぅ、してその意味は」
「意味とかはありません。しいて言えば勘かな」
「じゃあ、トンカツだな」
本多先生は少し寂しげで、それでいて下半身はノリノリでまるでヒラメみたいだった。
あたし達は、次の休み時間に本多先生に職員室に呼ばれた。
「本当にお前たちではないんだな」
何度もこう言うの。
壊れたラジオだってもっといい音色を奏でるわよ。
全然あたし達のこと信用してないの。
信用を得るようなことを、普段してないけどね。
「お前たち、昨日の夕方どこにいたんだ？」
まるでこれじゃ取調べじゃない！
「ひどい！まるで犯人扱いじゃないですか」
「こうなったら白黒つけてやる！なんでも聞いてください！みんなもそれでいいよね」
いっせいに声をそろえた。
「じゃあ、水野。昨日の夕方、何してたんだ？」
「黙秘します」
「いきなり、答える気ないんだもんな！？」
と模酢。
「まぁ、いい。これからは疑われるようなことはしないようにするんだぞ」
「いいのかよ！」
職員室を出て。
「ああ、ハラがたつ！っていっても実際にはハラが高層ビルのようにそそり建つわけじゃないからね」
佳代が悔しそうにニコニコ笑っている。
「こうなったら犯人を見つけるしかない！僕の家は幸いお金がある

から、お金を使って犯人をでっちあげてでも捕まえるんだ！お金持ちならなんでもしていいから、どんなことしてでもみつけてやる」
マサコプターが鼻をクルクル秒速２０回転させながら言った。
そうよ、そうよ！このままじゃ納得いかないもの。
あたしも鼻をクルクルと回した。
いつもやさしくて、お金持ちを鼻にかけないマサコプターは素敵。
「俺はあいつらが犯人だと思うね」
「おまえ？」
「俺も実際怪しいよ」
「自分のことには自信をもてよ！って誰が怪しいの？」
「あいつだよ」
学校からの帰り道ゲロが重力崩壊を起こした星の成れの果てみたいな顔をした。
団地の近くの公園の脇を通ると菊山達が野球をしている。
「柴山、ミラージュ！ミラージュ！その二塁のベース上でミラージュ！むしろ死んだ方が幸せだったと思うミラージュ！」
菊山達は、あたしたちが見ていることに気がつくとバットをぐつぐつに沸騰させて、インスタントコーヒーを入れてガブガブとした。
「おや、みなさんおそろいで！野球でもしにきたのかな？野球だったらいつでも俺たちはウエルカムだよ」
「なんだって・・・どうする？野球するか？」
「あたし達が！？野球を？椅子をふりまわすことしか能がないあたし達が野球を？」

第十話　パトロール

「よし！やってやろうじゃないか！・・・ばかぬかせーっ！？」
マサコプターは言った。
「やるのかやらないのかどっちだよ！」
「自分の胸に聞いてみろ！」
「私の！？なんで！」
「野球はできないわよ！野球なんてしたら命がいくつあっても足らないもの！ねえ、そうでしょみんな。一塁で殴られ！二塁で刺され！三塁で押しつぶされ！四塁で時間が逆に動き出す！五塁（季節と秩序を司る女神）でスピニング・チョーク」
佳代は今にも泣き出しそう。
「どういう競技だよそれ！？」
「そうよ！それじゃ相撲じゃない」
「相撲はそんな競技じゃない！」
あたし達が野球なんかできるわけないじゃない！
第一ルールとか全然わかんないし、ボールとバットの意味がわかんないし。
あたし達は公園のベンチに座った。
「あいつらしかいないんだ！野球でたたきつぶしてやれば自白するよ！やらせてくれよ！たのむよ！」
「あいつらが犯人って証拠はないんだよ！いつまでも同じことばかり言うな！テメーの口に札束ねじこんで黙らせてやろうか！」
どんな時でもマサコプターは冷静、お金を持ってるという心の余裕なのかな？
「それじゃあ、あの痩せた顔にメガネかけた、バッタみたいなお兄さんは？バッタみたいだから。むしろお兄さんみたいなバッタ」
いくらなんでもバッタがそんなことするわけないわ。
そんなことしたら大昆虫ブリンドル様にゴングと同時にタックルで

倒されて、すぐに腕を極められちゃうわよ。
「じゃあ、犯人はだれなんだろう？」
でも菊山でもバッタでもないと犯人はいったい誰？
「偶然通りかかったコックさんがやったって可能性もあるよね。そうなると捕まえるのは難しいな」
あたしと模酢はガックリと肩をおとした、家族の命と引き換えに。
「じゃあ、コックさん見つけたら吹きとばしてやろうぜ」
「吹き飛ばす？」
あたしたちが驚くと、ゲロは得意そうに
「そうだよ、コックさん見つけたら手当たり次第に皆殺しにするんだよ。そうすればいつか犯人をとっちめられるはずだよ」
発想が殺人鬼。
「日本中に何人コックさんがいると思ってんだよ！１０人以上はいるんだぞ！お前はお金やるから喋るな！口を開くたびに臭い息が俺にかかって不愉快なんだよね」
マサコプターってなんて頭いいんだろ、ゲロが口を開かなければ臭い息がかからなくてすむもんね。
「そうだパトロールしようよ」
佳代が言った。
「スーパーマーケットをパトロールだ」
ゲロが叫ぶ。
「なんで！？全然関係ないだろ！」
「万引きとかあるかもしれないし」
「今は関係ないだろ！真横がやられた周りをパトロールだろ」
「うん。今のところそれしかないみたいだね」
あたしはゲロを蹴り飛ばして、言った。
あたし達は学校が終わったら暗くなるまでは椅子を振り回して、そのあとみんなで勉強するって言ってパトロールにでかけることにしたの。
そんなわけで。

この夜から、こないだ真横が被害にあった周りをパトロールすることになったの。
ありの子一匹逃がさないんだから。
空き地から飛んでダラダラ帰って、晩御飯食べて、口からボロボロこぼしてまた飛び出していくあたし。
で、コックさんなんだけど・・・普通の人はいるけどコックさんとなるといないんだよね。
毎晩、コックさんを探して道の真ん中でクルクル回ってるんだけどな。
コックさんどころかコックさんの帽子すらみつけられない。
あと、財布も見つけられない。
いつになっても見つからないなあ、なんて考えながら歩いていると・・・前の方を菊山達が歩いていくのが見えた。
気にいらない後頭部してるな。
「ぐえええ」
鼻をラジオペンチで潰した時のような声が。
そして椅子を馬のように乗りこなすような音。
「まて、俺の頭にくっついているフードプロセッサーを取るんじゃねー」
菊山のうめく様な声。
ひょっとして犯人は真横にコンソメにクリームを混ぜたソースかけたのと、同じヤツじゃない？
ピントひらめいたね。
あたしはすぐに椅子に乗り込み。
「待てー！」

第十一話　小悪魔的な黒のブラジャー

椅子に乗ったヤツはピンクのトレーナーにフリフリのついた短パン。
頭にはコックさんがかぶる帽子をつけている。
完全に変態。
すばやく顔を左右に振ったり、止まったりして顔がわからない。
「サンバのリズムに合わせて」
そこへ、メジャー5年目のキャンプに入ったような顔してゲロがやってきた。
手にはなにか乗用車みたいな細長い物を持っている。
それを見たとたん菊山がゲロ飛びついた！
「お前が犯人か」
「俺はカステラだ！！」
袋の中身が国土の約4分の1にちらばった。
食肉、そして乗用車みたにに見えたのは郷土料理「テンボランス」だった。
テンボランスは汚い田舎の郷土料理で有名。
食べられません。
「テンボランスは焼いた白身魚の身を若きアスリートがすりつぶして、みそと合わせ、だし汁で割ってご飯にかける完成された料理。」
菊山は落ちていた食肉など約8トンを真っ二つにおった。
「何しやがる明日の俺たちの朝食だぞ」
「俺の頭にくっついていたフードプロセッサー返してくださいよ」
菊山は2003年の前回調査より土砂に突っ込んだような顔で、ゲロを睨んだ。
「おまえの頭にくっついているフードプロセッサー？なんだよソレ？」
ゲロは目を白青させた。
それが綺麗で楽しいよ。

「さてはフードプロセッサーが欲しいんじゃなくて公園でのことをうらんで、嫌がらせしてるんだな！そう言えば真横のランドセルにコンソメにクリームを混ぜたソースをかけて、なおかつ野菜のぶつぎりをかけた物を入れたんだってな」

真横ったらみんなに言いふらしてるのかしら?

内容を聞いていないとして、コメントを避けたいけどムカツク！

菊山は繁殖力が強く、在来魚の稚魚などを食べそうな顔で。

「お前らは悪魔か！お前らには人の血が通っているのかい！血なのか人なのか？」

「キレちまったよ・・・キレちまった」

ゲロはついにキレちまったようだ。

ゲロのこの言葉に完全に頭に血がのぼった菊山は、いきなり知らないおじさん頭にひざげりをした！

倒れた知らないおじさんにゲロがサッカーボールをけるみたいに、交互に手加減せず頭をけったりした！

「畜生！俺はこんなことをしてやるぜ」

清楚な白や小悪魔的な黒のブラジャーを付けた知らないおじさんに、菊山は幾度となく不当に圧力をかけた。

「野郎！倍にして返すぜ！」

とゲロは知らないおじさんに１３０メートルを超える大ジャンプを披露した。

「付かず離れず一定の間合いで菊山を助けるぞ！」

菊山の仲間達が、付かず離れず一定の間合いで、「ストレスの流れのように」などを朗読した。

あたしは、椅子を振り回した。

いくら知らないおじさんって言ったってこれじゃ殺されちゃう！

すると周りにいた人たちが、私を止めに入ってくれたのでどうにか収まったんだけど知らないおじさんは、知らないおばさんになっちゃった。

あたしはパパとママに、ある時は初球からスイングする積極性のあ

る一番バッターのように、あるときはユーモラスな語りを交えながら・・・専用の水槽に入れらた。
そう言うわけで今後のパトロールは禁止されちゃった。
翌日、学校に行くと模酢と佳代が駆け寄ってきた。
臭いなあ。
「どうして親にあたし達の秘密を話しちゃったの！」
どうやらうちの親がみんなの親に電話したみたい。
あたしの家には電話がある、すごいだろ。
「あたし、親に朝からブルペンで２０億８０００球を投げこまされたんだから！」
佳代、肩は大丈夫・・・。
「これには深い事情があるのよ。嘘だけど」
あたしは昨日起こったことを詳しく、フィクション八割で二人に話した。
二人は。
「きっとコンソメにクリームを混ぜたソースをかけたヤツよ！」
「ゆりが犯人捕まえてくれれば全部丸く収まったのに・・・役立たず」
そんな言い方ってある？
「しょうがないじゃない、ゆりはウミガメだもの」
って強い口調で佳代が言った。
あたしってウミガメだったの！？
「意味がわからないよ」
「どうしたんだ？」
ゲロとマサコプターがやってきた。
「ゆりはウミガメって話をしてたの」
「俺も昔ウミガメかなって思ってゆりの脳の形を分析した結果、全体的な特徴はウミガメに近いけど、独創的な活動などに必要な部分は、ウミガメより発達していたことがわかったんだよ」
ほらぁね。

あたしはウミガメなんかじゃないのよ。
「調べたのかよ!? 見た目でわかれよ、ウミガメと人間の違いくらい！」
「じゃあ、あたしは何カメなのよ！」
あたしが頭を抱えて叫んだところでチャイムがなった。

第十二話　僕は犯人がわかったよ

昨日のフードプロセッサー事件は、あっという間に広まったみたい。
みんながあたし達のことを見ているのよね。
顔の一センチ前で。
菊山達はまるであたし達が犯人みたいに言ってるの。
顔の一センチ前で。
証拠もないのによくも言えるもんだわ。
お昼休みには、また本田先生に職員室に呼び出されて。
「なんで私がお前たちを呼んだかはもうわかるよな？」
だって。
「セクハラの件ですか」
佳代は不敵な笑み。
「そうそう、そのセクハラの・・・違う！だれがセクハラだ！」
「ノリつっこみだ！」
「セクハラとは、強姦、強制わいせつや痴漢行為とか、わい談をするとか、ヌードの女性のポスターを貼ったりすることを言ったりします」
「そうそう、いつも私かかさずやっていることだな・・・やってないよ！」
「またノリつっこみだ！」
「セクハラも、程度によっては刑事罰が科せられるので十分注意してくださいよ」
「いや・・・すまん」
マサコプターはあっけなく、しぶとく言った。
すると本田先生急に考え込んじゃってもう帰っていいって。
結局本田先生あたしたちに何が言いたかったんだろ？
今朝は天気もよくて気分爽快。
あたし達が通学路をあるいていると。

「おはよう、山見さんたち」
っと声をかけてきたのは。
「潔白」
と書いた白いシャツとパンツを着た尾田悦子。
「昨日は椅子を振りましに来なかったみたいだけど」
あたしたちは三人声をあわせて
「昨日はちょっとみんなの都合が悪かったの。でもまたガンガンやるよ」
あたし達はぎゃーと奇声をあげると、尾田悦子はニコリと笑った。
「そうなんだ」
そこえ浦澤さん達がアイドルの情報誌を見ながらギャースカ言いながら歩いてきた。
佳代がその情報誌を横から覗き込む。
「いったいどんなおもしろいアイドル情報が載っているの？」
「あのね、今度の日曜日隣町に半ケツ賢者マリモリ様がくるの」
半ケツ賢者マリモリ様って言うのは、今人気大爆発中のアイドルグループ。
半ケツなのに賢者なのがうけにうけてうちのクラスにもファンが多い。
かく言うあたしもマリモリ様のファンなのであった。
「あたしも見にいこう」
「じゃあ、それを見に行こう」
と言って笑った。
「意味ないだろそれ！？」
「また、くだらない話しをしてるわね」
って真横がやってきた。
「またっていつもくだらない話ばかりしてるみたいじゃない！」
佳代が不満そうにつぶやく。
「あら違うの？」
真横の見事な意地悪そうな顔。

「いえ、違いません。むしろ望むところです」
佳代は深々とお辞儀した。
「なんで望んでるの！？」
「もうこいつらわけわかんない！」
真横は呆れ顔で行ってしまった。
六年一組の教室。
みんなであつまって話をした。
「ピンクのトレーナーにフリフリのついた短パンで、頭にはコックさんがかぶる帽子。そして椅子を馬のように乗る。僕たちはとんでもない思い違いしてたんじゃないだろうか」
っとマサコプターはつぶやく。
「思い違い？」
あたしの言葉を聞いて、マサコプターは続けた。
「そう、コックさんじゃなかったんだよ。帽子をかぶっているだけで・・・料理ができて、なおかつ椅子に乗るのがうまくて、家を七時ごろ出ても何も言われないヤツ」
この条件に当てはまる人物・・・まさかゲロ！
「ゲロなの！犯人は！」
あたしは思わずゲロにパワープレーをいかして暴行していた。
「ゲロは犯人じゃないよ！一つも条件満たしてないからね」
「そうか。知ってたよ」
あたしはゲロへの暴行をやめた。
「知ってたのかよ！ただ暴行したかっただけじゃん！」
「そうなったらあたしがもう一回暴行するしかないでしょう。もしかしたらそれが一番おいしいかもね」
佳代はさわやかな笑顔を見せた。
「おいしいってなんだよ！無駄な暴行をくりかえすなよ」
「わかってねーな」
あたしとゲロと佳代は口をそろえて言った。
「わかってねーのは、お前達だろ！意味わかんないんだよ」

「僕は犯人がわかったよ」
「えー！」

第十三話　半ケツ賢者マリモリ様

「まだ証拠がないから言えないよ・・・ところで今度の日曜日、隣町に半ケツ賢者マリモリ様がくるんだってね。椅子を振り回しながら、みんなで気持ち悪い目つきで見に行こうよ」
「いいけど・・・犯人は？」
いったいマサコプターは何を考えてるんだろ・・・どんな欲望が渦巻いているんだろう？
そして日曜日。
あたし達は椅子を背負って、バスに無理やり乗って隣町の劇場にやってきた。
劇場の周りは広くて、キャッチボールや殴り合いをしてる人がいる。そのうえで、あたし達が椅子を振り回すスペースが十分にある。
広いところで椅子を振り回せるのっていいなぁ。
「おっと、みんな椅子を振り回すのを辞めて僕の話を聞いてほしい」
マサコプターがしゃしゃりでた。
「むしろあたしの話を聞いてほしい」
どっこいそうはさせません。
「ゆり、なんか話があるの？」
「とっておきの怖い話があるのよ」
「それ、今必要か!？」
「絶対笑えるから」
「怖い話なんだろ!？笑えるの？」
「興味あるな。ぜひ、聞きたいな」
「あのね・・・」
「黙れ！」
マサコプターは静かな口調で言った。
「どっちだよ!？聞きたいのか、聞きたくないのか」
「とにかく、僕の話を聞いてほしい」

「マサコプターの話を？どういう体勢できけばいいの？」
「それはゆり。こういう体勢にきまってるじゃない」
そう言うと、電柱に衝突したみたいな体勢を佳代がとった。
「あたしはこうだと思うな」
周囲の住宅地域に爆音を響かせたみたいな体勢をとるあたし。
「体勢とかどうでもいいよ！普通に話しを聞けよ！」
いい加減、イラついた様子の模酢。
「そうだ！今は体勢の話じゃないだろう！ラーメンの話じゃないか！」
ゲロがかわいくウィンクして見せた。
「それも違う！もう話が進まないじゃない！マサコプター話をして」
模酢が突っ込みつつ、マサコプターに言った。
「僕たち、ここにくるって言ったろ。例のコックさん、また僕達を落としいれようとやってくると思うんだ。半ケツ賢者マリモリ様のファンに混じってね。もしくは半ケツに混じってね」
「えっ！？半ケツに混じる！」
「そこはどうでもいいだろ！例のコックさんが来るんだよ！」
模酢は、眉間にしわを寄せて。
「ってことは・・・コックさんはあたし達のクラスの誰かってこと？」
マサコプターはうなずいたあと、首を横に振って
「アッハッハ、イッヒッヒ」
ブッ飛んだ目で笑い声を上げた。
「どっちだ！！それに怖いよ！」
こないだマサコプターが、半ケツ賢者マリモリ様を見に行こうってクラスにの皆がいるところで言ったのはそういうわけだったのね。
「いったい誰なの？」
「お前だ！」
マサコプターはゆりを指差した。
「私だったのか・・・ごめん」

「ゆりは違うでしょ！あっさり認めちゃったよ！」
「まだ、教えないよ。捕まえて火あぶりしてからのお楽しみ」
「拷問する気満々かよ！」
「火あぶりされるのは佳代」
「私・・・やるだけやってみる」
「なんで挑戦しようとしてるの！？そんなところで挑戦心、出さなくていいよ！」
「とにかく今は秘密」
マサコプターは教えてくれない。
勿体つけて！
「そこいらの土砂に隠れて怪しい人物を探そう！そいつが何かしでかしたら、いきなり鉄製ハンマー（長さ３１センチ）で頭を一回殴ってみんなで捕まえるんだ」

第十四話　ついに犯人を捕まえた

あたし達はマサコプターとゲロ、あたしと模酢と佳代の二手にわかれて植え込みに隠れた。
犯人を見つけたらすぐに追いかけられるように椅子を担ぐ。
植え込みの中から椅子が飛び出ているけど、気にしない。
「ねえ、誰が犯人だと思う」
あたしは椅子をさすりながら。
椅子の部位の中では、一番角がかわいい。
「うん。あたしは思うには・・・」
「誰！？誰だ！まだ、出てきていない新しいキャラ？」
「ここまで来て、新しいキャラが犯人だったら酷いだろ！あたしは、花島真横だと思う」
「え？鉄板で焼いて食べる？」
「聞き間違えるにもほどがあるだろ！？犯人聞いてるのに、そんなに関係ないこと言わないよ！花島真横！第一被害者が犯人ってよくあるでしょ」
「いくらなんでもそれだけじゃ・・・証拠がないじゃん。まぁ、なくてもいいけど」
「それはダメだろ」
「・・・あっ！」
佳代が息を殺して指差す先には・・・。
「真横！」
真横はあたし達が潜んでいるところよりも、だいぶ前のほうで逆立ちした状態で、立ったり座ったり意味不明に土砂に突っ込んだり潜んでいた。
「いったいあんなところで何をやってるのかしら」
と模酢。
「儀式じゃないかしら？」

「儀式？」
佳代は首をひねる。
「雨乞いよ」
あたしは自信満々。
「あれで雨が降るの？」
「降るわけがないだろ！佳代、いちいちゆりの言うこと聞かなくていいから」
しばらくして半ケツ賢者マリモリ様の公演が終わり、終了のベルが鳴った。
劇場からたくさんの人が出てきたが、真横はそんなことは気にも留めずに、逆立ちした状態で立ったり座ったり、意味不明に土砂に突っ込んだり潜んでいた。
間もなく非常口から、コソコソ人が数人出てきた。
・・・その瞬間、真横が異臭を放って走った。
臭いなぁ。
「さては、あの人達にコンソメにクリームを混ぜたソースをかける気なんだわ！」
「やばい！金属バットで殴るなどして、金品を要求してやる！」
「やりすぎだよ！捕まるよ！」
「じゃあ木製バットで！滅多打ちぃぃぃ」
「バットの材質の問題じゃないよ！」
あたしと佳代と模酢は真横をじっくり追った。
向こうからゲロも走ってきた。
どうやらゲロも違うところから見張ってたみたい。
すごい、ストーカーみたいで気持ちが悪い。
完全に犯罪者の顔。
真横はコソコソ出てきた人の前にくるとアジ、サバ、イカを突き出した。
臭いなぁ。
「ベッショム様！あたしが釣ってきた生物を家に飾ってください」

真横がそう叫ぶと同時にあたし達は、ぶっ飛んだ。
「ベッショム様・・・？」
コソコソしていたのは半ケツ賢者マリモリ様のメンバー達だったの。
小さくジャンプしながら右手を5度、空へ突き上げ。
「くれるのか？その生物を？くさいナァ、うん。すぐに捨てるよ！
ありがとう」
って真横からアジ、サバ、イカを受け取って、すぐに道に叩きつけた。
そして急いで車に乗り込んで行った。
真横はうれしそうに小さくジャンプしながら右手を5度、空へ突き上げた。
「ベッショム様！素敵！」
はしゃいだあとで、あたし達が見てることに真横は気がついたみたいで顔を意識不明の重体みたいな色にしてる。
「いつからいたの！このことはみんなには言わないで！おねがい」
みんなには言わないって約束してあげた・・・ウソだけど。
絶対に言いふらすけどね。
アジ、サバ、イカ・・・おいしそう。
「真横が絶対犯人だと思ったんだけどなぁ」
佳代は走り去っていく真横を見ながら言った。
「それじゃあ、犯人は？」
あたしがそうつぶやいた時。
「みぎゃあああ」
どこからか女の子の悲鳴が聞こえた！
「みんなきてくれ！」
マサコプターが呼んでいる！
今度こそ犯人だ！
あたし達は椅子を肩にかけると走った。
でも疲れたので、すぐに歩いた。
そして椅子を置き、そこに座った。

「椅子に座ると疲れがとれるね」
佳代は椅子の上でくつろいだ。
「首も取れる」
「首は取れないよ！ってか休んでる場合じゃないでしょ！早くいくわよ」
「えええ・・・早くしたらお金くれる？」
「なんで！？あげないよ！」
「土地は土地はくれるの？」
「あげないよ！もう、いいからいくわよ！」
あたし達が走っていくと、会場の入り口で浦澤さんが倒れこんでいた。
財布を盗むチャンス！
って今はそんな場合じゃないか。
「いきなりコックさんが、あたしの大事な半ケツ賢者マリモリ様のグッズ。４畳半くらいのタオルを取ったの！」
浦澤さんのゆびを指す方をみたらマサコプターが椅子を持って、ピンクのトレーナーにフリフリのついた短パン、頭にはコックさんがかぶる帽子姿のヤツを追っかけている。
あたし達もそっちに向かって走っていく！
と、見せかけて逆にダッシュ。
フェイント！
「意味はないけどね」
「無駄なことしてないで、ちゃんと追っかけようよ！」
犯人は４畳半くらいのタオルのせいかうまく走れない。
タオルにしてはサイズが大きすぎるよね。
マサコプターが腰をくねらせ、椅子で犯人を殴っている！
でもみねうちだから大丈夫。
「よし」
ついに犯人を捕まえたのね。

十五話　解決

マサコプターは犯人を引き起こしコックさんの帽子を取ろうとした。
その時！
犯人は持っていた半ケツ賢者マリモリ様の４畳半くらいのタオルでマサコプターを叩きのめして、その隙に物凄いスピード歩いて去っていった。
「待てぇぇぇぇ！頼む！おねがいします！お金なら出します」
あたし達はそう叫ぶので精一杯だった。
犯人は少し立ち止まり、こちらを見て向かってきたが考え直して歩いて行った。
あたし達は、疲れたので追うのを止めた。
膝がピリッときたのよ。
無理をすると将来後悔するからね。
諦めも肝心だよ。
「畜生！あと少しで捕まえられたのに！」
「佳代が金額を言わないからよ！」
「ごめん。今日はお金じゃなくて、ドングリしか持ってない日だったから」
「ドングリしか持ってない日ってなんだよ！？いらないだろドングリ」
あたし達が悔しがっていると、起き上がったマサコプターは浦澤さん達に４畳半くらいのタオルを２０分間の格闘の末に返しながこう言ったの。
「腕が筋肉痛になったよ」
２０分間の格闘でマサコプターは筋肉痛。
「え！？」
「さぁ、いこう」
マサコプターは軽く笑うと、昨日の夜からポケットに隠していた牛

肉や豚肉を軽く投げた。
意味はない。
佳代は拾って食べていた。
卑しい。
あたしは・・・舐めた。
舐めただけよ。
そして、あたし達はマサコプターの歩くあとについていった。
「ここは・・・」
いつも椅子を振り回す、あの空き地！
幻覚じゃないよ！
「あ！あのバッタがいる！」
痩せた顔にメガネかけた、バッタみたいなお兄さんが空き地で黒いホットパンツとタンクトップ姿で、空を見つめていた。
完全にバッタスタイル。
今年はこのスタイルで決めろ。
「そうか、あいつが犯人だったんだな！」
ゲロはすぐにバッタにむかって走って行った！
止まって、また走った。
フェイントだ。
「おまえらは！？」
「え！？なに？」
バッタ兄さんはピョコンと飛び跳ねた。
「シュッシュポッポ！！」
ゲロが意味不明な言動すると、バッタ兄さんは顔を上向きにして口を開けたまま呆然。
「待て、ゲロ！そいつじゃない！・・・いや、やれ！やっちまえ！」
「え！違う？・・・え！？やっちゃっていいの！？」
「そいつは犯人じゃない！でも、気にいらないから」
「いや、犯人じゃないならやっちゃダメだろ！」
「模酢！とりあえずやってみようよ！違ったら違ったで、いいから」

「よくないだろ！」
「とにかく、そいつは犯人じゃない」
マサコプターの言葉に、あたし達がびっくりして振り返ると。
「どうかしたの？」
尾田悦子がヒザ上20センチのピンクの超ミニに「潔白」と書いた白いシャツで現れた。
マサコプターはそれを見て
「もうコックさんじゃないの？」
「ええ！？尾田さんが！！」
あたし達はもう混乱して、アスファルトをペロペロした！
「まさか尾田さんが犯人だって言うの？」
「みんなから信用の厚い優等生の尾田さんが？あの世界の尾田さんが！？」
「尾田さんは世界だよ」
「意味がわからないよ！なんだよ尾田さんは世界って！」
尾田さんも。
「何？そのコックさんて？ワタシチガウ！コックチガウ」
「なぜ、かたこと！？」
どう見ても犯人には見えないけど・・・。
「犯人の条件。料理ができて、なおかつ椅子に乗るのがうまくて、家を七時ごろ出ても何も言われないヤツ」
「・・・尾田さんは別にその条件満たしてるかどうかわからないじゃん」
「そう！だからもう、これは忘れよう」
「忘れるのかよ！」
忘れた。
「犯人は僕らのせいにしようと、最初にコンソメにクリームを混ぜたソースをかけ、二回目に菊山の頭にくっついているフードプロセッサーをとったろ」
「それがどうしたの？」

「別に特に理由はないよ。ただ言ってみただけ」
「言ってみたかっただけかよ！」
言ってみただけ。
名探偵の推理は大体、言ってみただけ。
「あっそれならあたしも言ってみたい。ガムテープ」
あたしも言ってみたくなっちゃった。
「意味がわからないよ！？今、それ言う必要がないじゃん」
「そうなったらあたしがもう一回言うしかないでしょう。もしかしたらそれが一番おいしいかもね」
「それ、こないだも言ってたろ！おいしいとか意味わかんないんだよ！」
「おっと怖い怖い」
あたしと佳代は薄ら笑いを浮かべた。
「あたしが犯人って証拠なんて一つもないじゃない」
マサコプターはポケットから牛肉や豚肉を出した。
「僕、さっきコックさん取り押さえた時、そいつのふくらはぎに牛肉や豚肉を二キロ縛りつけといたんだ。ちょっと後ろを向いてふくらはぎを見せてくれないかな」
尾田さんがゆっくり後ろを向くと、ふくらはぎに牛肉や豚肉が二キロくっついていた。
そんな小さな目印を何気なくつけるなんて！
「いや、二キロの牛肉や豚肉がふくらはぎについてたら、普通気がつくだろ！？むしろ気がつかない方がおかしいだろ」
あたし達は尾田さんを見つめていた、変な顔で。
なんで　尾田さんがこんなことをしなきゃいけなかったの？
あたし達はなんで変な顔をしたの？
もう、何がなんだかわからない。
「あたし、昔から椅子を振り回すのが得意だったの」
尾田さんがポツリと言った。
「尾田さんが椅子を振り回すのが得意だなんて・・・おまえ本当に

尾田さんかぁ！？怪しいな、偽者なんじゃないか？あぁぁぁん。そう言う偽者が出てくるんだよなぁ尾田さんみたいな有名な人となると」
あたしは尾田さんを睨みつけた。
有名人には偽者がつきもの。
有名人にたかるハイエナ。
「なんで俺達と一緒に椅子を振り回さなかったんだよ！俺たちがすごい底辺の人間だからかい？ごみ虫だからかい？」
とゲロ。
「あたし達はごみじゃない！」
「ゆりの言うとおり！」
「ゆりの言うとおり！」
「虫だ！」
佳代は少し怒っている。
尾田さんは笑いながら泣き。
「ゆりも、佳代も何を言ってんの！？全然、違うよ！
「パパやママがもう椅子を振り回すのは辞めて勉強しなさいって」
「尾田さんのパパとママは、本当のパパとママ？」
「質問が重過ぎるだろ！？って、今は関係ないだろ！」
「椅子を振り回すのを辞めたわ・・・でも本当は椅子を振り回したかったのよ！それなのにあなた達は・・・」
「だったらはっきり言ってくれればよかったのよ！椅子を振り回さないでって！」
佳代が言った。
「佳代・・・関係ない話はやめてよ」
「ごめん」
「いや、謝らなくていいよ！関係ある、話してたよ！」
「僕たちを罠に落として、椅子を振り回せないようにするなんて酷いよ！汚らしいよゲロは！あと臭いし、馬鹿野郎だよ」
マサコプターのゲロへの怒りは凄まじかった。

私を含めて、みんながこの気持ちは一緒だ。
「ごめんなさい」
尾田さんはただ笑いながら泣き崩れている。
「もういいよ」
ゲロがそう言葉をかけると尾田さんはまた爆笑して涙。
あたし達は黙ってしばらく立ち尽くした。
尾田さんは翌朝、職員室の本多先生にすべてを告白しにいったの・・・嘘をまじえて。
話を聞くと本多先生はみるみる顔色をビリジアンに変えた。
「なんということだ・・・！？」
「尾田悦子・・・お前達このことは皆には内緒だぞ。みんなが動揺して、不安になるといけないからな。少ないけどこれを」
「どんな罰も受けます。ゲロが」
って本多先生が現金をあたし達に渡し口封じ。
現金にはかてないですよ、げへへへへ。
「僕たちの時とはすごい違いですね」
刃物のような物を出してみんなで本多先生を責め立てた。
本多先生は渋い表情で。
「ばーか！」
っと言って頭を下げた。
まぁこれくらいで許してやるか。
そんなわけねーだろ。
本多先生に約束させられたし、これ以上尾田さんを追い詰めたくなかったから結局コックさんの正体はあたし達だけの秘密になったの。
濡れ衣の方はあの時、劇場にいた浦澤さん達が犯人はあたし達５人とはまったくの別人と証言してくれたおかげでもう大丈夫。
菊山の頭にくっついているフードプロセッサーは、男子便所に投げ捨てておいた。
菊山は男子便所でフードプロセッサー見つけたら事件のこと忘れて、男子便所で野球をしてる。

事件も終わって、これで晴れて椅子を振り回せるってわけ。
でも。
「あたしのこと気にしないでもいいわよ。絶対に、絶対に」
だなんて尾田さんが寂しそうに言ったこともあって最近は、めんどくさくて椅子を振り回していない。
人の気持ちのわかるあたし達。
放課後。マサコプターの席にハエのように集まって。
「最近椅子を振り回すのにも飽きちゃったよね」
「じゃあ、椅子じゃない物を振り回せばいいじゃないか。椅子にこだわる必要なんてないんだから。僕たちは振り回せる！これが重要なんだ、何を振り回すかはたいした問題じゃないんじゃないかな？」
マサコプターが言えば、ゲロも。
「そうだよな。俺たちは振り回せるんだ！振り回す物を探し続ければいいんだよ」
「あ！？うるせーよ！おまえに言われる腹がたつんだよ！迷惑防止条例違反で県警に捕まれ。あと、木っ端微塵になれ」
マサコプター、素敵。
元気いっぱいの5人組み、今度はどんなことにドキドキわくわくできるのかしら。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0087k/

六年一組の事件

2010年10月9日00時18分発行